

## 第一節 神の化身がこの世に誕生

### 日の出とともに生まれた女神

夜明けの静けさの中で、東の空からゆっくりと太陽が昇り、やがて朝日がまぶしく八畳の部屋に差し込みました。その時、一人の女の子が、元気な産声を上げました。この女の子こそ、この世を支配される最高位の神、大山祇命の御魂が封じ込まれ、人類を救うために神の世界から遣わされた、尊い運命もたれる供丸姫先生とは、だれがこの時想像したでしょうか。昭和二十一年十一月十五日、人類の歴史に残る、「真実の使者」誕生の時でした。

この時、ご家族は、お父さまの金蔵さま、お母さまの夕ヨさま、そしておじいさま・波蔵さま、おばあさま・キクさま、大おばあさま・トヨさま、さらに三年前にお生まれになった、ご長男・眞一さまの六人でした。

お父さまは、六人兄弟でしたが、家系は代々短命で終わる方が多く、特に女の子は一人も育ちませんでした。おじいさまは、「どうして森家には、女の子が育たないのだろう」と、よく言われておりました。ですから、何十年ぶりの女の子の誕生で、「よく女の子を産んでくれた」と、ご家族の喜びはひとしおだったのです。その喜びから、おじいさまが、「日の出とともに、この世に生を受けた子だから、『日出子』と名付けよう」と、命名されたのでした。

おじいさまは、かわいいお孫さまの誕生のお祝いにと、森家に電話を引かれました。戦後まだ一年余りで、どこの家にも電話のない時代でした。そして、その時ついた電話番号が、「五三七三」でした。「何と不思議なことか。女の子の誕生で、ついた番号が、五（イ）三（ザ）七（ナ）三（ミ）とは。何とめりたいことか。伊邪那岐、伊邪那美…、女神様の誕生だ。めでたい、めでたい。この子は女神様だ」と、おじいさまをはじめご家族中が、供丸姫先生のご誕生を手放しで喜ばれていたのです。

### 不思議な力のある少女

供丸姫先生は、幼い時から、ご両親の言うことをよく聞かれる、本当に素直なご性格のお子さまでした。外で遊ばれることよりも、家の中でお絵かきをされたり、絵本をご覧になったりと、そのようなおとなしい遊びがお好きでした。

幼稚園は、ご自宅のすぐそばの丘の上にある、成美学園に入られました。小学校もそのまま学園に進まれ、成績も大変良く、先生方からもかわいがられて、本当に楽しい少女期でした。